



下手な字でいい



手書き文字の大切さについて
て

谷口雅宣

下手な字でいい

下手な字でいい

谷口 雅宣

谷口輝子先生の書かれた本に『愛の相談室』というのがある。この本には「八十九歳御誕生日記念特別出版」と銘打ったオビが巻いてあり、昭和五十九年（一九八四年）の出版だ。その中に、「下手な字を書く」ということに悩む女性からの相談に答えていられる文章がある。「手紙は誠心で」と題された文で、書き文字が少々下手であっても、そこに誠心が表れていれば誰からも美しく見える——ひと言でまとめればそういう内容の御指導である。

同書の出版からもう四半世紀がたとうとしているが、この御指導は電子メール時代の今日にも、いや、電子メール時代の今日であるがゆえに、なおさら「正しい」と、私には感じられるのである。

電子メールは、便利このうえない情報伝達の道具である。私は日常業務で頻繁に利用しているので、そのことを痛感する。これを使えば写真や文書も送れるし、短かければ動画も送れる。しかも、送り先は隣の部屋にいる人であっても、地球の反対側に住む人であっても、ほとんど時間のズレなく到達する。しかし、この便利さのゆえに失われるものも多くある。

その最大のものは、書き手の`個性、であり、また`真情、とも呼ぶべきものだ。従来からある手紙では、それを葉書にするか封書にするか、便箋や封筒はどんなものを使うか、切手はどうするか、文面は毛筆で書くかペンで書くか、それともボールペンにするか、鉛筆でいいか.....こういういくつもの選択をしながら一通の手紙を仕上げる。これに対して電子メールでは、そんな選択が初めから存在しない。パソコンかケータイを開いて手紙の文面を打ち込み、「送信」ボタンを押せば、それでおしまいである。便利は便利に違いないが、その代り、従来の手紙が書かれるまでに必要な数々の選択の過程で表れる書き手の個性も、誠意も、配慮も、電子メールからは失われる。

これに加えて、手書き文字が伝える書き手の`味、や`心境、のようなものも失われる。例えば、そこに「感謝」という二文字があつたとしても、それがハンバーガーを頬^ほばりながら打つたのか、トイレの中で打つたのか、それとも自室の机

の前で襟えりを正し、誠心を込めて打ったのか、その違いは受け手には全く判別できない。これに対し、手書きで「感謝」と書く時には、本当に感謝の気持を込めると、いかげんな気持で書くのとでは、書いた文字に不思議と違いが表れるものである。だから電子メールは、効率重視で手っ取り早く意思を伝えるには優れた手段だが、誠意や尊敬の念、感謝の思いなど、心の機微を伝える手段としては、従来の手書きによる文字よりはるかに劣るのである。

「手書き文字に自信がない」という人は数多くいると思う。そして、それが理由でパソコンの画面で読む文字や、プリンターで印字した万人向けの文字の方が「失礼にあたらぬ」と考える気持が起こることも、理解できなくはない。しかし、受け取る側から見れば、機械から出される文字は機械的である以外はなく、その文字が真情を表現する力は、訓練された文章家ならともかく、前述したようになりに限定的である。それよりは、文字は特別に上手でなくとも「ていねいに書いた文字」の表現力は数段優れているのである。

だいたい手書き文字には、その人の人間性が出る。それがいやでプリンターなどの機械文字を使いたい人がいるのだろうが、そうすることは即ち「自分を隠す」ことだから、手紙自体の誠実さを弱めるのである。そんな手紙よりも、「字は下手で恥ずかしいけれど、一所懸命いつしよけんめい書きました」ということが説明抜きで分かるような文字の方が、書き手の誠意を有力に表現していると言えるだろう。

谷口輝子先生は、前掲した「字が下手だ」という悩みの相談に対して、次のように答えてられる――

お手紙を手にして、封筒の字を見た瞬間、私は「この人は真面目で礼儀正しい人だな」と感じました。中の文章を見ましても、一字一字を楷書かいしよでキッチリと、少しの乱れもない美しい書き方でした。私のように、年中人様のお手紙を読んでいる者にとっては、こんなに正しく美しく書く人のお手紙ばかりを欲しいと思いました。無暗むやみに字をくずして乱れた走り書きのようなお手紙を頂きますと、読みにくくて判読するのに苦しみますし、時間も多く費しますので、まことに迷惑に感じます。いくら達筆でも、くずし過ぎたお手紙を読んでいますと、くたびれてしまったりやになり、途中で投げ出したくなったり、他の人に読んでもらったり致します。そ

んな人は、相手に対して愛のない人であるし、礼儀知らずだと思ったりもしました。
。（同書、九五頁）

私の所にも手紙をくださる人がいるが、ほとんどが手書きである中で、たまにパソコンのプリンター文字が並んだ礼状を送って来る人もいる。そんな人に限って、自分の名前も宛先人の名前もすべて機械文字の場合が多い。そういう手紙をいただくと、そこに書いてある文面も「機械的に書いたな」という印象を強くもつものである。実際は、心を込めた手紙なのかもしれない。が、その「心」は、手紙のどこにも表現されていないのである。そもそも「手紙を書く」目的は、送り手の「心」を受け手に伝えるためであるはずだ。にもかかわらず、心情をもっともよく伝える「手書き」を避けて手紙を書くことは、不合理と言わねばならない。

では、電子メールを廃止し、すべての手紙を手書きでやれと言うのか、などと読者は誤解しないでほしい。本文の初めに書いたように、私自身、電子メールを毎日使い、その恩恵を大いに受けている。それを使うなどと言うことが、どれだけ時代の要請に反しているかはよく分かっている。ここで言いたいのは、人生には、時と場合によって自分の真情を吐露^{とる}しなければならないことがあるし、また、自分の方から誠意や愛情やユーモアを表現したいこともある。そんな時にも機械文字しか使えないというのでは、あまりに情けないということだ。

最近では、パソコンやケータイの普及と併行して、絵手紙やペン字の教室が盛んだと聞く。こういう現象は、現代人が個性のない機械の蔓延^{まんえん}と、そこから吐き出される画一的な文字や文章の洪水に飽き足らない証拠だと思う。私も日ごろからそれを感じているので、旅先などからは時々、絵封筒を出すことにしている。これは、手紙を入れる封筒の表（宛名と宛先を書く面）に大きく絵を描くものだ。意表を突いているので、受け取る側はきっと驚く。遊び心の表現には優れていると思う。

「下手な字」でもいいから、書くべき時にはていねいに書き、「下手な絵」でもいいから、描きたい時には大いに遊んで、自己表現の幅を広げてみてはいかがだろうか。

（二〇〇九年四月二十五日）